

審査の結果の要旨

氏名 孫 于正

本論文は、旧韓国（大韓帝国、1897年から1910年）における中等学校教育課程の形成を、官立の中学校と諸種の私立学校における教育課程の多様な編成の系譜と統監政治期（1906年から1910年）における「模範教育」による統合の過程に則して考察している。その探究によって、本論文は、日本の植民地化政策によって中学校が「高等学校」として最終段階の学校に再編され、教育内容の「実用」的性格の強調によって、普通教育が空洞化され実業教育が矮小化される歴史的な経緯を描き出している。

本論は2部6章で構成されている。第1部では、大韓帝国樹立から統監府設置までの中等学校の展開を、韓国政府による官立の中学校（第1章）、アメリカ宣教師によるミッション・スクール（第2章）、日語学校（第3章）および民族系私立学校（第4章）の4つの系譜に分けて、それらの教育課程の変遷を分析している。第1章では、韓国最初の中学校である官立漢城中学校が、産業振興政策に合わせて高等科に工業、農業、商業、医学、測定などの実業科目を含んで設立され、光武改革の主体勢力が親日派から親露派に変化するのに応じて外国語が「日語」から「英語」へと変更した点が示されている。第2章では、アメリカ宣教師のミッション・スクールの教育課程が、植民地化の意図により英語による宗教教育を中心的内容としていたことを示し、第3章では日語学校が、キリスト教を標榜する大日本海外教育会によって設立され、「実業」と「日語」を重視する教育課程によって次第に日本型中等学校の「模範」として植民地化の機能を強化する過程が示されている。そして第4章では1900年前後に成立した民族系私立学校が、英語と日本語を中心とする教育課程を編成し、近代的な中等学校の性格を帯びていたことが示されている。

第2部では統監政治期の学部の日本人官吏によって推進された「模範教育」の政策によって、上記の4つの系譜の中等学校が統合される過程を教育課程の変化に即して考察している。第5章では「模範教育」の政策の意図が開示され、「中学校」が「高等学校」へと改称されることによって最終段階の学校へと改編され、日語学校を「模範」として諸種の中学校の教育課程が統制される過程を叙述している。第6章では「模範教育」における中等学校のモデルが日本において頓挫した「実科中学」に求められた経緯を解明し、統合の過程で普通教育の機能が空洞化し「実科的内容」も単純労働の実用的な技能の教育に収斂したことを各学校の教育課程の実例に即して提示している。

本論は、近代韓国中等学校教育課程に関する最初の実証的研究であり、日本の植民地化政策によって編制された中等学校教育課程の特異な構造を解明し、旧韓国中等教育の輻輳する展開とその統合過程を跡づけることによって近代化と植民地化の両義的な展開を示し、この分野における日韓両国の今後の研究の礎を築いている。上記の諸点において、本論文は、博士論文の水準をみたすものとして評価された。